

【ポスター発表】

医療ソーシャルワーカーの社会的認知向上を阻害する事例

○ 悠翔会在宅クリニック品川 平田 明日香 (009595)

岡村 綾子 (金城大学・003446)

キーワード3つ：医療ソーシャルワーカー, 社会的認知, 役割

1. 研究目的

医療ソーシャルワーカー（以下 MSW）とは何をする人か、という問いは、患者や家族だけでなく、病院の同僚や連携先の施設職員等からも聞かれることが多い。MSW が実践を担保する十分な制度的位置づけがないまま導入されて以降、実践者や関係者の努力、さらに 1989 年の「医療ソーシャルワーカー業務指針」による MSW の定義づけがあり、現場での実践を続けて今日まで至っているが、明確な位置づけがないと思われる。

「ソーシャルワーカーに期待されることが多い反面、実際に担っている活動内容が社会からは見えにくく、ソーシャルワーカーに対する社会的認知度が低い現状にある」¹⁾と指摘されているように、社会的には知られていない。MSW を広報する手段や場を確保することと、MSW がどのような専門職として社会的に認知されていくかが重要である。しかし現状では、診療報酬において入退院支援関連業務を評価されていることで、退院調整に関わる業務の割合が高くなり²⁾、入退院支援の担当者として認知されていることが多く、MSW の業務指針で定義された業務内容とは乖離がある状況だ。社会的に MSW の役割を限定的に認知されている現状では、MSW の社会的認知の向上にはつながらない。そこで、社会的認知向上を阻害している要因を考えるために、社会的認知向上を阻害しているとみられる事例について検討することにした。

2. 研究の視点および方法

1) 調査協力者：調査協力者は A 県の MSW 5 人と病院以外で働く社会福祉士 5 人の計 10 人であった。

2) 調査内容：面接における質問項目の内容は「MSW をどのように説明したり、紹介したりするのか」「MSW に対する印象」「MSW の仕事内容や役割」の 3 項目である。

3. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守し実施した。研究協力者に対しては研究の趣旨を記載した説明書を用いて丁寧に説明した。調査への協力は任意であること、途中で中断してもよいことを伝え、同意書を交わした。調査は無記名で行われ結果は統計的に処理されるため、名前や情報が外部へ漏れることはないことを約束した。本研究は、中部学院大学研究倫理委員会の承認（受付番号 C21-0041）を得た。本研究に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

4. 研究結果

MSW の説明および紹介については「MSW を紹介するときには何か困っていることで介入

して支援してもらうために紹介する。一言で紹介することが難しい。ケアマネジャーが関わっていればその人の代わりですということもある。」「初回の面談に相談の内容例を説明する。例えば介護保険のこと、退院後の生活のこと、経済的な不安等を一緒に考えるなどを伝える。」と回答があった。MSW に対する印象については「話しやすそうで、聞いてくれそうな人、この人なら言いやすい。病院から退院してきた人で、MSW と関わったことがある人はお世話になった人とか、障害年金のことで関わっていたら、障害年金のことを話してくれた人、退院時に関わっていたら退院のことでお世話になった人、施設の調整で関わっていたら施設を探してくれた人のように、何かをしてくれた人というイメージになっている。」という意見が挙げられた。MSW の仕事内容や役割については「究極の何でも屋。24時間いろんなところから相談を受けられる人。縦割りの病院で横の関係で仕事をする人だと思う。」「医師や看護師は医療的な立場から患者のことをみるが、MSW はその人の人生や生活全体への視点から関わるのが役割だと思う。地域のネットワークづくり、社会資源の構築につなげていくことも MSW の役割と考えている。」等の意見があった。

5. 考察

幅広く相談対応ができるという MSW の良い点が、MSW の仕事内容を曖昧にさせ、業務内容の分かりにくさにつながっている。相談援助職の説明の難しさ、業務内容を想像することの難しさがある。業務内容の例として退院支援や経済的支援をあげるケースもあるが、これらは手段であり、MSW の中核業務である相談援助の結果であるため、重要な相談援助の過程を説明することはやはり難しい。反対に、MSW は困ったときの相談窓口という認識はどのケースでもみられたため、領域が広く、困ったときに相談する最初の窓口となり、適切な場所へつなげるという役割は適切に理解されている。

社会的認知の阻害要因について、MSW 自身の要因は、幅広く相談を受け付けた後、直接解決しようと抱え込んでいることであると考えられる。適切な場所へつなぐことや、つなぐ先の社会資源の情報を多く持っていること、不足している社会資源をつくるのが役割である。日々の業務に忙殺されているのは、役割を果たせないために、抱え込んでいる MSW は働き方を再考する必要があるだろう。また外部要因としては、MSW が幅広く相談を受けた後の業務内容が認知されていないことが挙げられる。業務内容が分かりやすく反映されている診療報酬には入退院支援の項目が主で、MSW の適切な社会的認知の促進を妨げていると考えられる。今後は MSW 自身が抱える要因と、外部要因を解決する方法の検討が必要である。

文献

- 1) 社会学員会社会福祉学分科会(2008)近未来の社会福祉教育のあり方について。日本学術会議, 第 59 回幹事会
- 2) 高山恵理子(2019)医療ソーシャルワーカーの業務に医療政策が及ぼした影響: 診療報酬の動向と医療ソーシャルワーカーの「退院支援」業務との関わり。上智大学社会福祉研究 43 P10-30